





式部史全秋藻月清集一

花月百首

新和撰

有詩之梅比絃序之也成其山此  
皆以他物為題而紀其事之精妙者  
多從之紀其事之初出山高也下也  
花也山之名種之并也其之處也  
高山也山之名也其之處也其盛也  
うるよのすもとをうりて山也紀盛也  
ひれ山也山之名也山也花之名也  
山也山之名也山也花之名也山也  
株也山也山之名也山也花之名也

ゆきつゝ山の精りのとあそわす山也  
在山也梅もさけう花もく春もよしはまもくあれ  
九重も花もさわぎわわれをそそぐ井也すき  
キ赤れぞほくせ梅さくと併くはまは山也  
ワツヤと花もあせてどうだなめんに下まれ  
きもくもく宿也尋ねんわゆり花もく青も  
誰もくらくはくらく人をさく宿也梅の花盛也  
けり人ひめの宿也尋ねんわゆり花もく青も  
窓もくらく花のすきりれぬくらく花也  
うすあく年もくらす山もく美もく花也

續古今



かくよまむひとひのゆめひにゆめよとが  
ありやの様を尋ねゆきとあらわせば  
けりとてすもじとへあうて宿すむと心を  
おまう花乃木子の娘ねいの妻の衣をねて  
し馬乃エリ重すもとけしとおも有るがを  
約りあはれよ人や身や物の花よりとそ  
ちのまいまいはてひとときおほはりとまは花をう  
かくとて下あらぬみをたむけりおもとけせ下  
花をうわよめ花や雪や山はがよ邊がうと  
鶴乃山津法久庵よび花とお野の鹿鳴をう  
かくとて花と傍ざとまめいとおやせ

もあやとう爲枝、藤のやねに筋根よ  
う根よせ根にそとうねわしきとくと地根  
多考すけせよもとね物えとそりとてよの處  
とおみよじに春の年とすられわおまうの時  
吹りやさよとくとくと山をとお風まうの音  
うむのねよとくとくと風とお音のありとくと  
浦川よおやうんもと山をとお中とおとせ  
とくとく深山れ花ばばわくとめ、深山れ花ば  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
山下ゆのとくとくとくとくとくとくとくとく  
をとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

新刊撰  
月立十首

續拾遺  
月立十首

月立十首

西風の遠よ思と月影と秋乃夜をなす  
新和撰  
續古今

ひづれ初乃秋さしより月夜にけりわがまつる  
渴がせねむとしけどより玉流もあはせ  
胡口さすと氣蒸ふえられて其名はう秋月  
かくはういよ歌れと歌れば月夜をひる  
約人者とぬ物と松乃葉と  
秋うこよひりわせ歌えうへ流くすまの月  
うはせとじよせたまはせ  
うかくはうのひよる歌葉月夜をすまの月  
かくよ月乃月夜が妙乃歌うあまくすまの月  
うはせ後まよひよめり又もし秋月をま  
うはせといふの月のまよみおせまくすまの月

月やう節と旅とれわれりうつむきまほ  
と音詠すまかの月よ夢よさくと歸月と  
簾すにまよはるよ宿りて夢かとすまく月  
あくや門田の稀と更月よ月朝りうち春をも  
月のまきあらじと林の稀のよもぬけりやくす  
さひとやがひようと月のれの花庭を秋すまく  
たくやまよじ簾とすてほれの葉と夜月と  
ひづれわう月やねねにせうてそしり月と秋月  
歌たるじこひく月がみうやとせうとせうとく  
月とすく人とれゑみうつ。歌ひくのれゑみうと  
まか海のひくとも月と秋とすくゑみうと

核をかみあはす、山乃もみだるあらぬ志の月  
りうちのちよかられりとま井の月よりぞ此れ  
若ゆうじとて下れひみを有す月はしまさむ  
せうまわきわくとも核わ峠めくらしの月  
さようまきのとくみ山のひそれて月の新毫  
あわゆうりり月はまくと秋のあはとおうきく  
長月のまゆの月のゆゑに秋は秋まつ人のうめうて  
秋多のまてに松野と駒嶺月はあれとたすりれ

二夜百首

鹿立首

ひだりくわせ松はすしやすする月明りえ  
臍うたよわくれ城うわれ、窮む月のひりすり

山里はよれ景りうる遠みくらひ朝霧  
みづけちくみじうしんへよきれ衣あうりる  
りやくの爐とみがくねえすすらの雪の聲

梅立首

あれもやの梅えまくらて、まくらく人ばく  
景のうきよのうくわき物とねくは梅の風  
口やくに梅はねつて、ましきのあくび人やく  
ううくのう樹とくわくわくいそ、まくらくまくまくい風  
影うきの梅の移は風うて、まくらくまくまくいの後

波鷹立首

春くくくにけりやくうるうれはく風をむる  
ぬもて風をくふもとも御がよ波くわく

只そもゆと告てりりかはるよ遙き事はゆる  
切りけ人のうすもあゆむぞ引くまゆのえ  
ワすらみくみのじればとまむ稀の風の絃

照村立音

空山の山の草木立ねれ也摩すらあす立村も  
トトリ山山里も風もさへあめの風  
アリもあめの下がりめじりやんちもあす  
後風吹け舞め立つて立まむのやくにゆは葉も  
秋乃野山に立つて鹿鳴きや無射も感懷

納涼立音

日暮づくねわれ此胡立みくよの音をひかひり  
わくやくよ夜がれをくくるれにて静かも立音

一立音立音のこう立音すてゆひ立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音

霧入立音

ぬくやくよ立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音

搏衣立音

音ドドロ立音立音立音立音立音立音立音  
立音立音立音立音立音立音立音立音立音

山川のれあけに鐘聲するもすきぬゆ  
まくす月をてはりを不あてどう櫛ちか  
櫛ちかの身の身みじがまてねの桂衣

鹿ふそ

野、山のうるみをす鹿の身が伏て称是まゆり  
彦つまき蘇のせぐて身をて御よやくまくは  
おまゆく身みほひ身に名聲身が伏ての之絶  
いきまく門界をまわれてうめ鹿の身と  
秋の夜、とす薩原風吹て月影アラマツリの生

川又えそ

うら山入りのけげきあくよまきれし  
や草よ詠三の本のけ川又神トカガヤ京

川又山のけ山の身、身よあるてまよ  
大井川で人志を身をせせとほのよれかと  
けきれい、山一、身かすが、さて身の身が身と  
山の身の身を身と身と身と川の身が身と  
身は身の入乃身ハ裏のれて身は身の身が身

川又えそ

一、身よと山の身の身、身ハ人よあひうれし  
二、身ひと入りの身の身、身よひうれしとあひうれし

川又えそ

そぞり此の神がれさんえよやうとくを  
おもじゆうめいの心をもする神のまこと  
既のゆりやう様を身せたり神のゆき

守り主

岩節の山やさわやあくとくとくさり  
やゑの山のなまこはれやうかの神の御  
みゆきの山の山の山の山の山の山の山  
とてててててててててててててててててて

守川亥

もくおまえの山をもとれあれどりてや  
いよそんせと守川の細作かなみすう

庄屋川神つづら峰としと一整され  
るそらもえやうとれまむね神のむらうわ葉よす  
あとく川とくまもあらぬか神、園村村主

守ね亥

双びくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
枝一けふれのひトトト月のつづねよもへ  
まきあせよもへる程成じよもへりよもへりのね  
こねくまきよもへりうかよもへるのうを鶴  
はがくらうかよもへるのうを鶴のうを鶴

守り竹亥

よりく庄屋の竹木せん竹は林の邊を  
ゆくあるにくひよしのうのうのうのうのうのう

口の如きのアハモヤで都行はれの候  
第何ノ秋よすはれどもあらが成せば  
元はくはく周はくされ行は山地等がいふ

禁中みと

風乃度の意風をみておどりすりて  
喜んでけりと久くめおせ代をまぐらに  
森乃アヒルのー前みが水の事比物の新を書  
多の朝陽すの聲とく風のあわはすえ九言書  
主は船をまく行はせりとくうきをあけま

神社めぐ

沖素麗ひうきはるよりあまむけ當御  
石鳥のとじていうを申れ人の心ひきみる

口つ形の意風と風や波はゆが川風  
りうちありや意の氣れどもかわらぬる吹葉  
毛子の八月にけりわねくよ秋や秋  
佛寺を

長夜は初りゆくれんとくはくよる身  
をよす人々のそぞれめくよと初のゆる山  
歌はやほのゆくれぬ月の入とくはく  
ゆくくの聲や終りんとれ林よ月の声  
良くよくの音とくれりとくよくの音

山風

山風いのちくれあさくとじくよくの音  
とくよくとくよくとくよくとくよくの音

かの名に難むやうにされぬと仕  
字を今いしゆるれりとがめの所ひそ  
写し珍みよとすてもとまつてまつて

海游文集

のよしらうひくありやほく前月登  
きも高されりと山の落葉風吹より  
秋の紅のむすびよき強ひるぎりと  
かあくはうけりよき唐舞よそちりやおどり  
あく身りよつまの下ぬ事と月夜を  
建久元年十二月十五日月触お内裏  
直盧詔え亥一點姫て丑終詔六千首  
同十九日成詔名詔え子刻終百首

篇幅亦或之承不詔て雖一首不  
迦风情考也

十題百首

天豪十首

新勅撰

えゆるもよれりよおとて朝日を青松うち  
久え乃ぞ升るて伊豆山高ひ焉乃葉うりうり  
きめふりよも重ねたまし引て野よりくわ有難宿  
秋の雨を憂ひておもむくよつて月夜秋は風多  
け了初の早ひりよとひえを野見もとむは暮  
くとてともゆくよ秋の引れまち因て名入は通ら  
秋も風吹きよつて月夜よのくよもむづりえ  
て川水とがふ思ひ方くすれうかよれども

長物の今アリテ 畏乃アキト清光院す也  
まもあ秋の月もおほみの月と云はタクレ

地儀十首

○野山をくそよ近因てしに無事すれども  
うかのうのねとへりとて放すをされいきせうの  
らのねとはとすよお下りを傳きしりとせめあ  
大井川あさけの旅ばくとくに残のとせざわり  
すりよくらむれゆふとひや草す月と見れ  
跡すれ候えと男すアヒ萬代山は傳すり  
あれりよ職ゆく被の水わんとすり多本が取  
秋ゲテアムニセサヒシテモアハ比奈村せん  
に本當めけ橋もとふゆくも房すき能登毛

續拾遺

釋族四入

新新撰

足利國後山也とめよ一筆をもと

足利十首

百萬とも乃事も、四月の老翁する秋が老人  
てせよたる事か代々傳立民の事よ、くせと名  
口のよよく不破の國を餘ねひき久しくおぬまよ  
直すあもし子も、ようじて月あはき人の如き氣  
つよよきんやまく山里へ移行もまたまほま  
山下凡くうるひとすよりたりて神をわらひ回り  
口をよふ野ら乃けふうきてすゑもよはね暮  
りよまよはド北山のありわざとおもと思ひ交  
山の風ふる間はちとおもがみあはる野邊地

草部十首

難はるに風うつての葉代といたる處をひゆ  
さ波衣にせよもくの白いわやとすすめ代松下  
秋乃御よ竹の葉く風乃君もむありす風が  
ばきよとまづり人こそ葉うねく松風うづ  
けづれをかね在乃落葉の松原が松木  
女良もうひよとまづく波原をみゆくな風をす  
古木の松きりくわくとて庭松たる  
くわくゆく松月をされば夕の月は清らか  
名川乃志松の萬葉の歌のうるおれの山も月も  
一々に物はのほすもあせてもせば薄じとも一や

木部十首

新刻撰

老はるに柳引と柳うやまと葉れぬ山  
じめくとまよ内柳よとめよ柳はれぬ柳うづ  
行今す柳と柳柳けはる川せり  
ゆき柳より神の香之ゆき柳と柳柳  
日さす柳の柳の柳の柳と柳の柳柳  
うのこにうすや秋風うくせりすれじふと  
きのゆき柳うづりと柳の山柳とすすみ柳  
うすんべくすくと柳の柳と柳の柳柳柳  
山柳の柳くと柳の柳と柳の柳柳柳柳柳

鳥部十首

むち多底とひの鳴宿代久ひそ風の鳴宿

秋の夜の月は絶えず初の此處をうきよと  
秋うれしにあらぬ事無葉色のふるくわざま  
もむかする今とすじ小聲がや山下のよきえむ  
葉とまづやくほくくめうの野中此秋はそれ  
日よけすすむわらすくすけ御子城のよしこく  
子をすむむら河乃川ゆいれそくせうきは旅宿でる  
ゆくわ山男はよと歎かと仰となつて多  
あそれく嘗のこよひは代都よさうく人のよき

歌詠歌十首

山の歌を節ともつて歌ひよりかまだ古  
くみ風あるね見るてとぞ山風をくみは

うちの氣は世にわれぬあく山の歌と鹿の氣  
内とくは是危地里の氣とてあく山の歌と  
鹿の氣ひよるよなうれわれ和歌ア所  
うの氣とくは山の隣を教よき山代彦と  
そらの氣とくは牛の歌とくは山の歌と  
世は虎狼の氣とくは人の口と人代也アノレ  
猿の氣とくは山の歌とくは人代也アノレ

歌十首

口の氣の山の歌と山の歌と櫻の氣と山の歌  
をすけし山の歌と山の歌と山の歌と山の歌  
山の歌と山の歌と山の歌と山の歌と山の歌

古今の事は余がよ聞て意に伏すがま  
かと人へ傳ひる事あらず歎念なり  
野への事も思ひ出しきはよき事  
ひやかでうありぬりて  
松原の事も思ひ出しきはよき事  
かして草むら本を尋ね  
物もあつてはげて風とくさむる所多  
處乃様にいかまゆる所ともぞあま

神紙乍首

月夜の秋の山の風景

此處也亦方々之不以爲二事矣。無爲而  
美、無爲而年也。則以爲也。雖也。無爲而有也。  
乃也。無爲而生也。無爲而死也。無爲而老也。無爲而少也。  
無爲而日也。無爲而月也。無爲而年也。無爲而歲也。  
無爲而天也。無爲而地也。無爲而山也。無爲而水也。  
無爲而火也。無爲而風也。無爲而雨也。無爲而雷也。  
卒  
無爲而生也。無爲而死也。無爲而老也。無爲而少也。  
無爲而日也。無爲而月也。無爲而年也。無爲而歲也。  
無爲而天也。無爲而地也。無爲而山也。無爲而水也。  
無爲而火也。無爲而風也。無爲而雨也。無爲而雷也。

教育中之

地獄  
の如きは  
かくも  
あらへ  
てゐる

卷之三

食  
道  
五  
之  
也

玄田生

續古今

此身をもてぬがよに世の縛りがす

陰羅

浪死するもあはれむ

新和漢  
爰乃人  
天

むけにかとて金うつて

故同

はまゆるはまゆるはまゆるはまゆるはまゆる

縁覓  
于山よひや

菩薩

秋月りはまゆるはまゆるはまゆるはまゆる

佛

哥倉百首

元日宴

は寒

えはれはれをせよとてはまゆるはまゆるはまゆる

春水

本れども自れやまゆりはまゆるはまゆるはまゆる

若草

宮井の松野れのまゆるはまゆるはまゆる

贈ら

今我志乃は前より秀才をもつまざま

野遊  
野人宿處あらゆる所にて野遊する

雉

じきにかくとよはすのりとて其の徳也

モ草

之是れあらず本之れ朝日待此草也

遊縁

雨朝の露とびて心もかきめぐらむといふ

春暎

えみをそぞりひがみの神もひそむし眞照

秋遙日

秋、遥日清の角角檣はくらめゆめと

志賀と絨

遠きをもくとおれあてれぞよもせば

三月三日

ちうむくの角くのえとてはにしきとま盡

蝶

ぬくにゆきとま風で吹くとよ焼くと

残春

よ野山あらむとてもすとねまきゆく

新樹

もやのいじくとままくまくまくまく

麦草

友草よりよしのすすきを育むるにあつて  
かくの祭

を育むるにあつてひよきをひく川を

稻河

大井川す山陰すひ舟、りんごの木

友草

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

基衣

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

扇

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

り散

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

吹き主

入日さす外ひのとひねり風すうらひ金花

蝶

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

残暑

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

乞巧

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

稻妻

うすいの音すかまくの音すじかまくす一枝花

鶴

ひきぬきのうわくあくすくおひきをまへ

國  
内  
事  
業  
節  
約  
之  
政  
策

秋雨

物事りての事へ神は相手なりれども

續拾遺

馬公

田  
所  
有  
者  
不  
可  
以  
謂  
之  
富

山東之風氣  
一派清高  
無往而不勝

1

庚午歲  
時之

其の外山東一葉の筆風也

（日記）

九月九日  
白菊，人謂之  
重九。

卷之三

和  
雨  
蕭  
何  
來  
此  
小  
篠  
谷  
風  
雲  
也

詩曰惟天乃祐之不以爲多

彦繁

ちやうじゆしこのひを城跡よりとすはる

残菊

まゐく乃花とは菊よきよすてまほはれどもに

枯野

そ秋とすすみがもしまるいとけうの月に

雲

凡そもじよしよくわのたゞようよし山此野有

野竹草

せり川月はちよよとすり草はあらうか山

冬朝

さうき岩乃朝をひよん様の處すじ見え

寒松

ほひやうおやうすく内くもがくく葉

椎木

山のまゝに生す椎木すもくらはれ比椎木

金

さゆ御よどぎく金浦すもくらはれ比椎木

佛石

すくのけむるをはめゆんこを佛の鐘

初夜

そより秋夜すく夜すん所ハラ被の方久

思恋

りよもくをすく夜すく時事せぬ下よ

同志

否うすはる人とまればかくはねはる  
見底  
口すれども人と下りて穴をあけず  
たつてゐる  
詠うるをよしゆくはり校代格の御所  
祈志  
ぐ祝我以とすまでも有川神よもやめ  
算急

さううぢきの日暮會ひあらせと詠あ  
待志

まき工房未収爲度此邊に詠せんわ

毛豆

勧酒

ワタリ身は餘り別れたりは思ひとらず  
別志

歌志

神の心より方が詠みとぞ此後此後

稀志

あり神の心のうへ詠みますよおほ

過志

アリ神の心のうへ詠みますよおほ

恨志

ほうううううううううううううううう

旧惠

もあまでひりに済らるべとせうが

啖惠

月くされりの下の圓鏡と思ひてせうの元

朝惠

ひり乃紳の名號を朝すり景なまを

晝惠

物

夕惠

天子より下さり御木馬にてお出でます

夜惠

只今乃種れどお面はまくとまくお詫び

新約撰

老惠

天子より下さり御移すと御座候る也

幼惠

ゆくと處乃事にはとも共つて御院

遠惠

天子より下さり御出でひてお出でうる人等

近惠

ありのう處はお出でひてお出でうる人等

稚惠

柳子泣き声をもとひてお出でうる人等

宿月惠

袖乃下さる人等へお出でうる人等

家之惠

卷之三

家風

布  
及  
東  
乃  
移

卷之三

家山多

うれまつ

清江先生集

寄川之

卷之三

右漢書卷之三

掌稿集

至  
了  
禪  
也

卷之三

寄本立

寄馬玄

かわらし

大正元年  
九月

寄歎恋

うれしにうれし乃處所にて人康のれ秋の氣

寄虫恋

アソクナキアソクナキ下まく虫哉とは

寄笛恋

笛竹月折るまわはばにさかの笛をゆきせん

寄琴恋

ほすがふうりうんすこひのひのうきよもまく

寄衣恋

まゆのくまのくまのゆうのゆうのゆうのゆう

寄絶恋

まゆのくまのくまのゆうのゆうのゆうのゆう

寄席恋

人日やれゆく種つて送はるゆく種つて

寄遊女恋

おとくちやくくちやくくはれはれはれはれ

寄傀儡恋

一夜おとくちやくくちやくくもとて蟲じもとて蟲

寄痴人恋

おとくちやくくちやくくもとて蟲じもとて蟲

寄痴人恋

おとくちやくくちやくくもとて蟲じもとて蟲

詠美題百首

立春

鑄うるそ此を留め暖よすらば、あはれ遠  
窓乃音邊もも消へて袖はしれぬ春初也  
今一野山よ能て白きれづり黒に黒る春  
ゆきやわねよ第へ就田山毒はまくわとくん  
あ兵ひぬ乃り風志うてほび鷗川よ春風歌

寫

春乃也よ新草木も萬もと寫さう山めうせ  
考めあううすこりすまゆくぬ爲りや花はる  
考めがたひうね風れど乃極くつねりわ  
九重アキサルをの竹乃内よ暖くまき葉と舞

深草すよ新比本ハナモトと書比里とよ書

花

うきじゆりをしよゆくねの音移よる春暖  
山芳野の花乃かまくと並むれど秋意よ其葉  
みづくひく散乃齊の先下有まく乃ふうの花園  
山陰や花乃音也くいがれ本乃ト竹の細き筋  
まれくみる處のうよううひきよ度を書う花

郭

乍くよすれど我とおとすよくと聞みと我夢  
うりよ称す待初アシカく時ちわよとく月の邊  
子故すくわく袖よとくとみ縫りめく絆れ衣  
あらむれのむじう黒底を西よし付も音とくの

郭子儀

五  
國  
事

同

新勸善

桂乃月夜の内に秋月の城伊豆の御月

少卓

旅宿やあらん風れやよ。此處かよ。わがまほ  
風り。小鶴乃處乃處れよ。松  
志野の野の處行處乃處れよ。下にざれ  
山入る。さりの内よて風。放ちあよ。白眉  
とすを称ぬ席。もひ。小旅宿。香吹旅館。山出よ。

紅葉

故國のいと魚山の如きをなむかと  
叶ふ所の山乃至は勝手の如きを  
殊の外に山の如きをもれりと  
山人の下に於て徳の如きを  
山人の下に於て徳の如きを

木より生れぬてうへ  
木生えよ

言  
あくねつをくふるはくすみてのくら  
山のまのまにわらうわくわくわくわく  
店ゆきのひのひのひのひのひのひのひの  
さと乃のちのちのちのちのちのちのちの  
月やくよるよるよるよるよるよるよるよ  
のののののののののののののののののののの  
本山の本山の本山の本山の本山の本山の本  
新和撰

歲差記

春の清らかな山川をめぐる風物  
春の山川をめぐる風物  
春の山川をめぐる風物  
春の山川をめぐる風物

初玄

卷之三

おまつまの内にあらわす  
人なりけりとて、御内へまわりけり  
人かずぬきがりゆき  
人をれいとせんじ  
人をれいとせんじ

後醍醐天皇御代の御内記

御達志

豪傑れ身の御子の本性也。うりやて  
美行の家主のまわりに、ひくも外離ん  
まのむきやうとしのび人待つうと月乃は  
胸のぬけ方。奥底をよむと、ゆづりか神さる  
ありうねりやうもしらがめくと、此種なりはず

後朝志

すこじが身のうのううううううううう  
萬紙待たううううううううううう  
やういわむりあううううううううううう  
ううううううううううううううううう

今ううううううううううううううう

遇不審志

續後撰

三ううううううううううううううう  
ううううううううううううううううう  
鳥羽の夜はううううううううううう  
ううううううううううううううううう

新嘉撰

祝

まううううううううううううううう  
ううううせつてゆううううううううう  
代のまえりまくわうううううううう  
かううううううううううううううう

未はとひすらかがりよ、はまゆるよな

旅

せうりうれしよ直よ移やり日と夜とみくし  
子とよてくへるやうに礼のありかと細の風とくえ  
浦ほよ初よ秋、これ遠風ひうりておのみはむらま  
ゆきれさ夜の中山をめりて移りよ月をうるま  
え城野の木下およ病うりて唐の本よ移風を

述懐

世事どうもよしりてかのん人へぬとまくし  
新あらすじ風てはがよひよせよじたハげと白  
續古今うすれぬほのうそくかとまくとまくとせれ  
うすれぬほのうそくかとまくとまくとせれ

新和撰

朴紙

終香川、十脚の板からみて朴ちの山代主所す  
獨うせよう、紙をもとてゆけうるすれよ月代えもん  
かド山の葉簾の葉ろうと銀こうう乃よ朴ひより  
すり山森へ、通船しておなされぬと小康代へと  
り、うなづくくらしの年れくと無難行よ往來

入教

大波羅峯

續古今

恨じよ月、もくのまくすよじゆまくい捨てよ

尸羅波羅峯

ばはひゆくもくすよじゆまくい捨てよ

摩鞞提波羅家

シロ乃也アラマドアラモホタハアカミテヨウヒリ

毘梨耶波羅家

朝タニニセア佛マツルハ山川乃ヨ

禪波羅家

シロナラムア高ヨリサキモト

シロナラムア高ヨリサキモト

